

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

コメント

マレーシアの中のサラワク

篠崎香織

本コメントは、直接には第二部の三つの報告¹に対するものとなりますが、第一部の報告²もなるべく踏まえてコメントをしていきたいと思えます。

コメントをするにあたり、時代を 3 つに区切って考えてみたいと思えます。第一に、マレーシアやマラヤ、サバ、サラワクといった領域が存在していなかった時代です。第二に、国家の枠組み作りが進展していく時代で、植民地統治からマラヤの独立を経てマレーシア結成に至る時代です。マラヤ、サバ、サラワクがそれぞれの政治的領域となるまでに、またそれらの政治的領域が今日のマレーシアという政治的領域となるまでにかかなり長い時間がかかったわけですが、そのことを念頭において考えたいと思えます。第三に、2000 年代以降の時代です。マラヤで構築された「民族の政治」という枠組みが、それまではマラヤである程度うまく機能していたのが、うまく機能しない部分が出てきた時代です。そうしたなかで、マレーシア全体が一つのシステムに組み込まれていくような状況が発生していることに着目したいと思えます。

第一の時代である、マレーシアもマラヤも、サバもサラワクも存在しなかった時代と関係が深いご報告として、佐久間さんのご報告がありました。佐久間さんのご報告では、後背地、港市、海洋交易の関係性をつないで考えることの重要性が指摘されました。こうした関係性は、マラッカ海峡地域からボルネオに至る広義のマレー世界を対象とする歴史研究において、それなりに研究の蓄積があるお話であるように思えます。ただ半島部を研究対象としていると、どうしてもマラッカ海峡地域にしか目が向かなくなりがちとなります。しかし広義のマレー世界を対象とする歴史研究は、ボルネオ地域も含めたより広範な領域に対して通用する議論として展開してきました。半島部を研究対象とするにしても、サバやサラワクを研究対象とするにしても、東南アジアにおける広域秩序に関する議論をふまえることが重要であることを改めて認識しました。

第一の時代に広義のマレー世界では、王国の版図が明確な境界線をもたず、広域的な秩序が存在していたわけですが、そうしたなかで明確な国境が植民地期以降形成されてい

¹ 本特集では、祖田論文、鈴木論文、及川論文がこれら第二部の報告に当たる。

² 本特集では、佐久間論文、森下論文、竹内論文、加藤論文、金沢論文が第一部の報告に当たる。

き、国境線に沿って秩序が形成されていくという側面がありました。これが第二の時代です。半島部の視点からこの時代を見ると、植民地期を経て自治を獲得し、独立していく過程の中で、華人、インド人、マレー人／ムスリムというまとまりが形成されたことがまず指摘されます。またこのことに関して、マレー人／ムスリムはスマトラやジャワ、スラウェシ、中東、インドなど多様な地域を出自とする人たちを内包していたにもかかわらず、マレー人という一つの集団性にカテゴライズされることをその構成員となる人たちが受け入れていったことが指摘されます。こうしてマレー人／ムスリム、華人、インド人という3つの民族が形成され、各民族が代表者を出して政治に参加するという枠組みが1946年から1948年にかけて構築され、そのなかでマレー人が優位となる政治構造が1957年のマラヤ独立までに確立していきました。

そのようなマラヤと一緒に国家を構成するとなった時に、サラワクの人たちがどのように対応したのかについて、趣旨説明やいくつかの報告において、サラワクが自身とマラヤとを区切るという対応をしたことが指摘され、マラヤからサラワクへの入境が制限的となっていることがその例として挙げられました。サラワクの人たちの対応は、これ以外にも多様な対応がおそらくあったと思われます。及川さんが報告した李永平の事例も、マレーシア結成期におけるサラワクの人たちの対応の一つとして理解できるように思いました。李永平は、マレーシアとなったボルネオから出て行き、台湾に行きました。李永平は、マレーシアは嫌いであることや、自分が属する国家ではないと認識していること、マレーシアの一州となったボルネオには帰らないことなどを発言している一方で、文学を介した精神世界のなかでボルネオに回帰してきます。しかしそこで発見するボルネオは、マレーシアを介していない世界です。マレーシアの結成があったからこそ、李永平の世界が生まれたという側面があるようにも思いました。

石川さんがコメントで、サラワクにはマラヤ優位、あるいはマレー人優位を受け入れるのは嫌だという心境があると述べられていました。また祖田さんが報告のなかで、サラワクではマレー人概念が状況可変的であることを石川さんの研究を引用するかたちで紹介していました。これに関して思い起こすことは、先ほども述べたように、半島部のマレー人ももともと一枚岩ではなく、多様な地域に出自を持つ人たちであったということです。サバやサラワクでは先住民系のムスリムのなかにはマレー人とは個別の民族を名乗る人たちも多いのに対し、半島部では多様な出自を前面に出さず、マレー人として一枚岩的に自らを名乗る状況が進展してきたと言えるように思います。なぜ半島部では、自らの出自をあいまいにするかたちでマレー人概念が展開していったのか。このことは、サラワクにおいて「マレー人は嫌い」という感情が存在することの大きな背景となっているようにも思われます。祖田さんの報告のなかで、サラワク研究を相対化することの必要性について触れていましたが、半島部についてもサラワクを参照点の一つとすることで、半島部の社会のあり方を相対的にとらえ、新たな視点を打ち立てていく必要があるようにも思いまし

た。

最後に、第三の時代である 2000 年代以降についてです。半島部では、マレー人、華人、インド人の代表者を自任する政党が連立与党（BN）を構成し、連立与党内の民族政党を通じて人々が政治に参加し、資源の公的な分配を受けるといった仕組みが 1990 年代まではそれなりにうまく回っていたように思います。しかしこうした仕組みは 2000 年代以降、うまく回らなくなっている側面があるように思います。2008 年以降、半島部では与党と野党が拮抗しています。これに対してサラワクでは、鈴木さんと森下さんの報告にあったように、BN が安定的に勝利しています。半島部では 2008 年以降、BN 以外の政党に政権を一度任せてみてもいいかもしれないという思いが一定程度存在しています。そうした思いを抱いている人たちからすると、サラワクの人たちは現政権の政治運営を支持しているように見えるようです。総選挙やサラワク州議会選挙の時には SNS に、「なぜサバやサラワクの人たちは BN に投票するのか？」という嘆きにも近いコメントが多数見かけられました。

しかし本日の報告やコメントでも指摘されていたように、サラワクの人たちは BN を全面的に肯定しているわけでもないようです。サラワクの人たちは、ナジブ政権と交渉するうえで現在の状況は自分たちにとって非常に有利であるからこそ、BN はあまり好きではないけれど BN を支持するという判断をしているのかもしれないかもしれません。半島部のやり方に対して異議申し立てをしたい、そのやり方を変えたいからこそ、半島部において与野党が拮抗し、BN がサバとサラワクに票を依存している状況を利用して、BN から利益を引き出そうという判断が働いているように思います。つまり、サバおよびサラワクが積極的に BN を利用する状況を、半島部における政治的な分裂が生み出しているというわけです。サバおよびサラワクの支持を基盤として BN が政治的な安定を維持するなかで、半島部の政治はますます分裂しつつあるようにも思います。そのような意味において今日のマレーシア政治は、半島部、サバ、サラワクが相互に関連する一つのシステムのなかで動いていると見ることができます。サバおよびサラワクにおいて BN への支持が安定していること、またそのために BN 政権が安定していることは、半島部とサバおよびサラワクの双方を見ないと理解できないように思います。

（しのぎき・かおり 北九州市立大学）